
ある日、突然、念力が使えなくなったら

ぱじゃまくんくん男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日、突然、念力が使えなくなったら

【Nコード】

N8908P

【作者名】

ばじゃまくんくん男

【あらすじ】

念力使いの一家に生まれた私。でも、ある日、突然、念力が使えなくなつて、家族からギャアギャア怒られる最悪の事態。でもさ、そんなの使えなくなつていいじゃん。むしろ、念力使いつていうほうが気持ち悪いでしょ。でも、もっと気持ち悪いことが発覚。死んだお兄ちゃんが、時空間を歪める念力を使っていたんだつて。でも、それってなんなの？

末娘の私

おかしいなあ。

ポテトチップスの袋をゴミ箱に捨てたいんだけど、捨てられない。いくら凝視しても袋が浮いてくれない。

なんなんだろ。最近、勉強をさぼっていたから、忘れちゃったのかな。

いやいや、そんなことはないでしょ。袋を浮かせることぐらい、小さいころから出来たことだよ。忘れるとか忘れないとかじゃなくて、持って生まれたものだよ。

それっ。えいっ。えいっ。

うーん、ダメ。

ちよつと、精神を統一。

「観自在菩薩、行深般若波羅密多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄、舍利子、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色……」

えいっ！

ダメ。びくともしない。

まさか、念力が使えなくなっちゃった？

ウソー。そんなのやめてー！。焦るんだけど。

そんなら、戸を。

それっ。

ダメ。

ヤバイ。相当ヤバイ。

「ハア」

どうしよう。もしも、念力が使えなくなったら、私って勘当されちゃうんじゃないの。昔からうちの畑中家って念力一家でぶいぶい言わせていた連中じゃない。うちで念力を使えないのってお母さんだけだよ。一番上のお姉ちゃん、志奈ちゃんも、二番目のお

姉ちゃんの琴ちゃんも、死んだお兄ちゃんも使えていたのに、私だけ使えなくなっただってなったら……。
どうしようどうしようどうしよう。

あーあ、一番上のお姉ちゃんにぐちぐち言われるんだろっなあ。

杏音は勉強していないからそんなことになるのよ。田舎の美容室のカットモデルなんていう馬鹿げたことをやるからそんなことになるのよ。背が高くてちょっと可愛いからっていい気になっているからそうなるのよ。

なんて、頭でっかちの口悪の嫉妬深い志奈ちゃんだから、ぐちぐち夜通し言っただろっなあ。

「杏音えー。ご飯よオー」

げっ。まずいなあ。

「杏音えー」

「いらなーい。お腹いっぱい」

「なんでよ」

「食べてきたー」

すると、お母さんがガチャとドアを開けてきちゃって。

素知らぬ振り、素知らぬ振り。念力？ 使えるよ。でも、今は勉強中だから、そういう話はあとにしといて。

「どこで食べてきたのよ」

「どっか」

「どうせ、お菓子の食べすぎでしょっ。いつも言っているじゃないの。夕飯前にはあんまりお菓子を食べるなって。それなのにいつもばくばくばくばく食べちゃって。あなた、ずいぶんと自分のスタイルに自信がお有りのようですが、今に太るわよ。今に」

うるさいなあ。ぴーちくばーちく。

「だいたいね、どうして杏音がお菓子をそんなに買いこみ、どうしてそんなに服を買いあされるのかって話なのよ。あなた、もしかして、高校生のくせに念力を使ってお金稼ぎでもしているんじゃないの。まさか、あなた、念力で悪いことでもしているんじゃないでし

ようね」

「してません。してませんからさっさと台所に帰ってください」

「だから、ご飯の時間だって言っているでしょっ。いい加減にしないさっ」

「杏音っ！ 何やってんのよっ！」

げっ。台所では志奈ちゃんがおかんむり。機嫌が悪いのかしら。

さすがに志奈ちゃんには逆らえないから、私はすぐごと部屋を出て行く。

「何をやっているのよ、皆を待たせて。何様のつもりなの」

狐目の中の瞳でキツと睨み上げてくる志奈ちゃんに、私は委縮。

「ごめんなさい」

「この前、東京に出ている琴音も言っていたわよ。杏音はわがままだった」

うるさいんだよ、ババア。二十九にもなつて独身のくせに。ブスギツネ。さっさと結婚して家を出て行ってよ。あ、できないか。ブスギツネだから。

「まあまあ。とりあえずご飯を食べよう」

と、お父さん。チューしてあげたい。大好き。優しいから。なんてたつて私は末娘だもの。

「いただきます」

皆で手を合わせたあと、お食事、始め。

……。

お父さんと志奈ちゃんは念力を使って、お魚のお皿をずっと手元に引き寄せたり、納豆を念力だけでぐちゃぐちゃ練っている。

すごい変てこな光景。私はこんな光景がすごい嫌で、食事のときぐらい普通に食べればいいじゃんって怒ったときがあったけど、念力の訓練だから仕方ないとかかんとか。

だから、私も念力を使わされるわけだけど、今日は使えない。なので、お母さんと同じく納豆は箸でなう。

じろーっと狐目を光らせてくる志奈ちゃん。

「何をやっているのよ」

「う、うん。ちょっと、握力を鍛えようかと思って」

「もしかして、杏音、使えなくなっただんじじゃないのぎくつ。」

「そうなんですよ、素直に言いなさいよ」

「そんな、怖い顔で迫られたら素直になれるわけないじゃない。」

「杏音っ!」

「まあまあ、志奈」

と、ブスギツネを制するお父さん。大好き。私に対してはいつだって優しい眼差し。だって、未婚だもの。

「そうなのか、杏音」

「う、うん。使えなくなっちゃった」

「そうしたら、お父さんが突如としてギロリ。」

「杏音、本当に言っているのか。あ?」

え、え、え。

「答える。本当なのか」

「本当じゃないかもしれないけど、本当かも」

「どっちだ!」

「本当です! ごめんなさい!」

すると、志奈ちゃんと顔を見合わせたお父さん。二人揃って、ハアと溜め息。

御機嫌斜めの私

そもそも、おかしいじゃない。

どうして、私の一家は念力使いなのよ。世の中の女の子はみーんな普通の女の子。どうして、私だけそんな訳わかんない義務を負わなくちゃいけないのよ。どうして、あんなに責められなくちゃならないのよ。

知らない！ 念力なんて知らない！

「どうしたの。今日の杏ちゃんつてずいぶん御機嫌斜めじゃん」

いつもの昼休み、いつもの校庭の隅っこ、いつもの芝生、いつもの香織と由利恵。

「別にイ」

香織と由利恵はケータイをかちかち。ゲームでもやっているみたい。私は興味がないから寝転がって青空観察。

二人は私が念力使いだっていうのを知っている。でも、普段は念力を使うことはしないから、別段、特別扱いされることもないから、この二人だけは親友。

でも、相談したくないなあ。私、念力が使えなくなっちゃったの。なんてさ。むしろ、迷惑でしょ、そんな相談されたら。

雲がぶかぶか。風がそよそよ。私は鬱々。

「よお。また寝転がってんのか。スカートの中が見えるって言っているだろうよ」

ちらと目を向けると、花本楓くん。また、グローブを装着している。野球馬鹿。昼休みぐらい休めばいいのに。

「見えないもん。楓くんが見ようとしているからよ」

「興味ないから。畑中のスカートの中なんか」

「ねえねえ、そういうイチャつきは私たちのいないところでやってよね」

と、由利恵がにやにや。

「イチヤついてなんかいねえよつ。ボールを取りに来ただけだ」

そう言って、校庭の奥まで走って行く楓くん。いつつもじゃん。

キャッチボールをして、ボールを取り損ねて、私に絡んでくるのは、ま、別にいいけど。カッコいいから。

「てかさ、いつになっただら付き合っつ、杏ちゃんと楓くん」

「こちらにもやにやしなながら香織が訊いてくる。知るわけないじゃん、そんなの。告白してくれないんだから。」

私はごろりと背中を向けて無視。だいたい、そういう浮いた話をする気分じゃない。念力が使えなくなっっちゃったんだもの。頭の中にあるのはそればかり。どうしたら念力が復活できるのか、このまま使えなくなったらどうなっっちゃうのか。

どうにもならないけど。普通の女の子になるだけだけど。

でもさあ、そう簡単に済ますわけにもいかないんだよね。

こんなことは畑中の家が始まって以来だ、なんて、お父さんがプチギレしてたし。それに死んだお兄ちゃんに合わす顔がないし。

死んじゃっているから会わないけど。

お兄ちゃんだったら何て言ってくれるんだろうな。別に念力なんか使えなくたっていいよ、って笑ってくれるんだろうな。

生きていたら二十六歳か。

なんで、死んじゃったんだろ。謎。病気だつて皆は言うけど、なんか違う。私はそのときにはまだ小学二年生だったから詳しいことはわかんなかったけど、最近思う。なんか違うつて。

やっぱ、念力と関係があるのかな。

「観自在菩薩、行深般若波羅密多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄、舍利子、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色……」

「ちよつと、杏ちゃん。何を言っているの。おかしくなっっちゃったの」

「あ、ごめん。ちよつと、般若心経を唱えたい気分だったから」

「はあ？ 何、それ」

「ねえ、杏ちゃん。朝からおかしいよ。どうしちゃったの」

私は唇を尖がらせる。だって、念力が使えなくなっちゃったんだもん。でも、友達にはそういうことは言いたくない。

天井裏をあさる私

ハア。

ハア〜。

どうしましょう、畑中杏音。

帰宅してきたものの、なーんか、肩身が狭い。

えいつ。えいつ。

やっぱり、ダメ。

鞆をぶん投げると、机の前に座って腕組み。とりあえず、整理しよう。落ち着こう。

まず初めに、どうして急に念力が使えなくなったってこと。ポテトチップスの袋を浮かせようとするとするまでは、普通に使えていた。自転車のペダルも念力で漕いでいた。だから、今日はすごい疲れた。急になんだよね。急に。

昨日、何かあったかしら。何も無いよね。いつも通り。しいて拳げるなら、ブレザーの袖に糸くずがついていたことくらい。なんなの、あの糸くずって。ああいう糸くずってどこからやって来るの。だって、あんな白い糸くずが出る理由なんてないもの。もしかして、宇宙から飛来してきたとか。

ああっ、もうっ。また、くだらないことを考えちゃった。糸くずなんてどうでもいいじゃん、もうっ。

こういう集中力のなさなんだよね、私って。だから、般若心経についつい頼っちゃう。そういうのが原因なのかな。

でも、集中力がないのって今に始まったことじゃないでしょ。生まれつき。念力も生まれつき。だから、関係ない。

生まれつき……。

なんで？

そういや、天井裏に、念力のことについてお兄ちゃんが書いた小さいノートがあったなあ。

ここは元々お兄ちゃんの部屋。ある日、志奈ちゃんの財布からくすねたお札を隠そうとして押入れの天板を開けたら、訳のわからないノート集がごっそり入っている段ボール箱があって、ちよつと覗いてみたんだけど、訳がわからないから封印。

あのノートを読んでみれば、念力が使えなくなった原因がわかるかもしれない。

ということで、押入れに入って、天板を開けてみることに。天井裏に体を入れて、埃まみれになりながらも、とりあえず段ボール箱の一番上にあつたノートを入手。一度、押入れから退避して、ノートを捲ってみる。

大学ノートには綺麗な文字がびっしりと並んでいる。ふむふむ。時空間の歪め方ね。ふむふむ。

えっ？ なにこれ？

私は誰もいないのに辺りをきよきよと見渡してから、机の前に着席。すごい物を発見しちゃったかも。世紀の大発見。

なになに。時間を逆行している反粒子の質量とスピンを念力によつて。

意味がわかんない。無理。頭がおかしいんじゃないの、これを書いた人つて。

でも、これは多分、お兄ちゃんが書いたものなんだよね。ということは、お兄ちゃんは時空間を歪めることが出来ていたってことなのかな。

ただ、時空間を歪めるつて、ずいぶんと抽象的な言い方だけど、結局はなんなのかな。タイムトラベル？ でもなあ。時空間を「歪める」っていうことしか書いてないもんな。歪めたら何が起きるのよ。

ぱたん。

怖いからやめておこ。これは禁断の書物。封印。さよなら。

他にないのかな。もっと、取扱説明書的な挿絵付きのわかりやすいやつ。

いちいち天井裏を行ったり来たりするのは面倒だから、ひとまず段ボールを出しちゃおう。うー。ぺっぺっ。埃だらけじゃーん。ばっちなあ。もう。なんで、天井裏なんか隠しているの。

ノートは全部で五冊。どれもこれも小難しいし、挿絵なし。お兄ちゃんって念力オタクだったんだね。じゃないと、こんなにびつちり書けないもん。

杏音について

あ。なんだろ。人のことまで研究していたなんてキモさ爆発、鳥肌モノだけど、四の五の言っていていられる状況じゃないしね。

杏音は自己主張が強く、甘やかされて育てられており、年齢を重ねることになおさらその自我は独善的になっていくと思われる

ただの悪口じゃん。なんなの、マジで。

また、落ち着きがない。一つのことを考える能力に欠けており、目の前の目標を考察していても、その中から新たな目標を発見してしまって、新たな目標に目が向いてしまう。そうして、結局は最初に立てた目標を解決できない。よって、ゆくゆくは念力を欠落すると思われる

なんで！　なんで、よって、ゆくゆくは念力を使えなくなるの！　理由と結論が結びついていないじゃないの！　かなり、はしょっちゃっているじゃん！

それで、私のことは終わり。

これだけびつちり書いておいて、私のことはたったの六行。たったの。

役立たずのボロノートを段ボール箱の中にばいと戻し、机の前で頭を抱えちゃう。

どちらにしろ、私は念力を使えなくなるってことだったのか。

それならそうで、いつか。どうせ、使えなくなるってことだったんだし。念力なんて知ーらない。

ジョギングの私

朝六時に起きて桜川の土手沿いをジョギングするのが毎日の始まり。

田圃に水が張ってからというものの、風の香りも初夏の兆し。でも、暑くはない。少し、汗ばむ程度。

シェイプアップしないとね。なまじ、念力使いだから、こういう決めごとをしないとつ

いつい体をさぼらせちゃう。

あ、でも、念力を使えなくなったんだ。

「畑中アー」

背後から楓クンの声。そうそう。念力を使えなくなっても、楓クンに会えるからね。でも、振り返ってあげないもん。

「おはよう、畑中」

「おはよー」

楓クンの傍らには茶色い大きな犬のラッキー。野球馬鹿の楓クンはラッキーと一緒にランニングをするのが日課。

私は小学生のときからここを走っていたけど、楓クンを桜川で見かけるようになったのは去年の今頃ぐらいから。ラッキーは前から知っていたけど。あと、楓クンのおじいちゃんも。

楓クンは高校に上がってから、こっちのおじいちゃんの家で家族で引越してきた。それで、足が悪くなってきたおじいちゃんの代わりにラッキーの散歩を始めたみたいで、いつも通りジョギングをしていた私と偶然ばったりと会っちゃった。

あのころはお互いあんまり知らなかったから、ちよつと仲が悪かったけどね。野球馬鹿のくせに頭がいいのがむかついた。

でも、カツコいいからOKってことになった。

「そろそろ中間テストだけどき、畑中、今度赤点取ったら思い切り笑ってやるよ」

並んで走っていると、いつもこういうことを言っただよ。だから、むかつくんだよ。自分は頭がいいからって。

「楓くんこそもうすぐ甲子園でしょ。一回戦で負けたら思い切り笑ってあげるから」

「あのなあ、畑中」

楓くんは走りながら呆れ顔。

「甲子園ってというのは全国大会のことを言っただけだから。おれたちは県大会レベルだから」

「そんなの知らないし。興味ないもん」

「興味ないとかじゃなくて、常識だろ」

「私には関係ないもの」

「あ。その言い方もわかんない。ちょっと傷つく。畑中に応援されていると思っただけになあ」

「応援はしているよ。でも、野球には興味ない。でも、応援はしているよ」

「なんか、よくわかんねえな。応援されているのか応援されていないのか」

河川敷の広場におりると、楓くんはストレッチ。私はラッキーと寝転がってじゃれ合う。ラッキーってふわふわしていて気持ちいいの。可愛いし優しいし。小学校からの友達だもんね。

「おじいちゃんは元気なのー？」

「元気だよ。足はあんまり良くないけどさ。畑中に会いたって言うていたよ」

「じゃ、今度遊びに行こうかな」

寝転がったままラッキーを抱きしめていると、ラッキーが顔をペロペロしてくる。

「来いよ。じいちゃん、喜ぶから」

「ふーん。でも、楓くんが来てほしいだけだったりしてね」

「畑中さあ」

楓くんは大股広げて背中をぐいぐい倒しながら言う。

「よくそんなことをさらつと言えるよな。なんて言うの。開けっ広げって言うの?」

「開けっ広げているのは楓くんじゃん。足を」

「馬鹿だなあ」

と、楓くんは笑う。

「馬鹿だもん。ね、ラッキー」

私はラッキーの喉をこちょこちょしてあげる。ラッキーは喜んで暴れる。

「あのさあ、畑中」

「何?」

「畑中って念力っていうのを使えるんだったよな」

私はじゃれるのをやめて、楓くんをじいつと見つめる。なんなの。今までそういうことなんか訊いてこなかったじゃん。

「いや、悪い。なんでもない」

「何。気になるじゃん」

「いや、そのさ、畑中のその念力って人を動かすこともできるのになって」

「できたらなんなの」

「できたら、その、じいちゃんも念力で歩かせてあげられないかなって。いや、散歩でいいんだよ。前みたいに、土手沿いを」

しーん。

どうして、そういうことを今になって言うかなあ。

「いや、駄目だよな。そういうよこしまなことに使ったらな。そういうものに使ったためじゃないんだもんな」

「使えなくなったの」

「え?」

「念力が使えなくなったんです。全然、これっぽちも。突然」

「そ、そうなんだ」

「だーかーらー、わーたーしーもー、おじいちゃんをー、手伝ってあげたいけどー、できませんっ」

「そっか。使えなくなるんだ。そういうのって」

「そんなはずないんだけどね。私の家始まって以来だってさ。こんな。ちょー怒られているよ。だから憂鬱」

「スランプとかなんじゃねえの」

「そう言いながら立ち上がった楓クン。ラッキーが私の腕を潜り抜けて、楓クンに飛びかかってくる」

「楓クンはポケットの中から野球ボールを出して、それを放り投げる。ラッキーが尻尾をぶんぶん振りながら追っかけて行く」

「よくあるじゃん、そういうのって。今まで出来ていたことができなくなるって。おれだってそうだ。最近、球がバットに当たらない」

「それだったらいいけど」

「協力するよ」

「ラッキーがボールを拾ってきて、私は首を傾げる」

「何を？」

「だから、また、使えるようになるために」

「そんなこと言ったってさ、楓クンに何ができるのって話なんだけ
じ。」

「あつ、でも、楓クンならお兄ちゃんのノートがわかるかも」

鳥肌の私

「難しすぎて、何を言っているのかさっぱりわからないな」
チエツ。頼りにならないの。

私は絨毯の上に寝そべって、ポテトチップスをぱりぱり。念力が使えないと、手がべとべとするんだよね。もうちょっとべとべとしないよう開発できないのかしら、ポテトチップス屋さん。

「なんとなく理系だし」

楓クンがぶつぶつ言っているけど、私はテレビのリモコンをぼちぼち。チャンネルを回していくけど、競馬とかゴルフしかやっていない。日曜日のお昼って家にいると退屈すぎる。

「あつ、なんか、畑中のこと書いてあるぞ」

「それは見ちゃダメっ」

私はあわてて立ち上がり、ノートを封印。

「なんでだよ」

「Hなことが書いてあるから」

適当に笑う私に、楓クンは唇をむずむずさせる。

「そんなようなこと書いてなさそうだったけど」

「ダメって言ったらダメ」

私の悪口だもんね。それを見たら、どうせ楓クンも大笑いするだろうしね。想像するだけでむかつくから見せてあげない。

「てかさ、結局、やる気なさそうじゃなか」

「なんの？」

「念力を復活させることにだよ。おれがノートを読んでいる間、寝転がってお菓子食べていたり、テレビ見ていたり、何もしてないじゃん」

「そんな怒らなくなっていていいでしょ」

と、唇を尖らせた私。楓クンをちよつと睨みつける。楓クンもふてくされていたけど、お互いに一歩も譲らず睨み合っていたら、楓

クンが視線を反らして終了。

「悪い」

「私こそごめん。もうちょっと真剣にやる」

仲直りしたところで、新しいノートを楓クンに渡し、楓クンが頭を抱えながらノートを捲っていく。どういことなんだろう、と、ぶつぶつ呟きながら。

「どういことなんだろうね」

「時空間を歪めるって書いてあるけど、歪めたことで何があるんだ」

「うんうん」

「実際、そんなことをできていたのかよ、畑中のお兄さんは」

「うんうん」

「いや、うんうんじゃなくてさ」

「なに？」

「だからっ、畑中のお兄さんは時空間を歪めるなんてことができていたのかよ」

「知らない」

楓クン、舌打ち。さらに溜め息。頭まで抱える。

「やっぱ、やる気ないじゃん」

「あるって。だって、知らないんだもん、しょうがないじゃん。お兄ちゃんのことなんてほとんど覚えてないしさ」

「じゃあさ、お姉さんとかに訊いたらどうなんだよ」

「無理」

「どうして」

私はなんかつまらなくなってきた、机から退散して、ベッドの上に寝転がった。なんか、つまんない。せっかく、楓クンが来ているっていうのに、大真面目に取り組んじゃってさ。どうせ、わかんないんだからいいじゃん。

「おい、畑中。訊いてみればいいだろ。じゃないと、わからないじゃんか」

「だから、無理だっば」

「なんでだよ」

「禁句なの。お兄ちゃんの話をするのは」

禁句ってほどじゃないけどね。雰囲気的にあまり話題にできないだけ。お兄ちゃんの名前が出るだけで、家族の表情に影が差すんだもの。

「だいたいさ、私の家って念力使いの家系っていうのもそうだけど、普通の家として考えても複雑なの」

「複雑って？」

「姉妹兄妹の中で、私だけお母さんが違うの。だから、なんか、あんまり訊けない。そういうのは」

「そっか」

楓クンがノートをそろりと閉じていく。

「なんか、悪い。そういうこと全然知らないのに」

「大丈夫。気にしていないもん」

私は楓クンに向けて寝返りを打ち、しょんぼりしちゃった楓クンを見つめる。

「私こそごめんね。やっぱり無理だった。お兄ちゃんの書いてあるノートって変態すぎて、きつと、誰にもわかんないと思う」

「まあ、最初におれが言い出さなければ良かったことだったかもしれない」

「いいのいいの」

ベッドから飛び降りると、私は絨毯の上のポテトチップスを楓クンに押し付ける。

「もう念力は終わり。食べて食べて」

元気を押し付けられた楓クンは口元を緩める。私は押入れからテレビゲーム機を引っ張り出してきて、テレビにセット。

「この前ね、お父さんに買ってもらったの。でも、やり方がわからないから教えてよ」

「てかさ、畑中」

「なに？」

振り向いてみると、楓クンが青ざめた顔でポテトチップスの袋を眺めている。

「これ、さっき食べていたよな」

「食べていたよ」

「開いてないんだけど、ほら」

ぞぞぞっ。とりはだー！

怖くなってきた私

私がポテトチップスを食べていたのは確かなこと。私一人だけだったら確証できないけれど、楓クンも見えていたんだから間違いないよね。

「これって、例の時空間を歪めたあれなんじゃないのか」

私は何もしていないよ。念力すら使おうとしていないよ。楓クンは私の仕業だと思っていたみたいだけど。

むしろ、ドン引きしていた。で、帰っちゃった。

この杏ちゃんを化け物扱いですか。

uh shit……。

これって差別だよね。人と違う私を色眼鏡で見ちゃってさ。逃げるように帰っちゃってさ。楓なんて大嫌い。お別れ。さよなら。

別に付き合っていたわけでもないけど……。

ていうか、楓クンがうじうじしてるからじゃん。どうせ、私のこと好きなんですよ。私のことを一日に二十四回ぐらいは考えるんですよ。あー、今夜は畑中の夢を見たいな。そう思って眠りにつくんでしょ。

だったら、さっさと付き合ってくださいって言ってくればいいのにさ。そうしたら、私だって仕方なく付き合っただけなのにさ。

知らないもんね。他の男の子に取られちゃってもさ。私って結構モテるんだからさ。中学校の同級生とか、他所の高校の男子とかにメアドとか訊かれるんだからね。

ま、面倒だから、メール入ってきててもシカトだけど。

もしかして、楓クンって、たまに来たメールに私が返信していないから怒っているのかな。

違う違う。今はそんなことじゃないんだってば。どうして、ポテトチップスが元通りになっただけのこと。

なんか、簡単に整理しないと考えられないから、紙に書く。

？ 誰の仕業ですかー？

？ いつ元通りになったんですかー？

？ 私が食べたポテトチップスはどこに行っただんですかー？

うーん。？ 番に関しては、私の仕業っぽい。でも、私はもちろん
時空間を歪めることなんてできないし、今は念力すら使えない。

お兄ちゃんの幽霊とか？

私はあわてて部屋の中を見回したけど、幽霊の気配なし。ま、靈
感なんてないから、どっちにしたって気配なんてわからないんだけ
ど。

でもさ、時空間を歪めた結果、ポテトチップスが元通りになっ
たら、死んだ人も元通りにできるってことなのかな。

……。

怖いから考えるのやめた。

私は紙をぐしゃぐしゃに丸めて、ゴミ箱にスローイング。ポテト
チップス事件はお兄ちゃんの幽霊の仕業。私は知らない。私は無罪。
私は普通の女の子。

だいたい、こんな汚いノートがあること自体、危険なんだ。時空
間を歪めるだなんて、ああ、恐ろしい。どうして、そんな馬鹿なこ
とをやっていたのかしら、お兄ちゃんは。

だから、死んじゃったとかね。時空間を歪めることに失敗して、
自分が消えちゃったとか。

……。

私は段ボール箱を抱えると、ガラス戸から庭先に出て、母屋から
長屋へ、長屋の裏の焼却炉に行こうとしたんだけど、調度、長屋の
二階から降りてきた志奈ちゃんと出くわしちゃった。

「何やってるの」

すごく怪訝そうに私が抱えている段ボール箱を見てくるブスギツ
ネ。

「それ、何？」

「え？ 別に？ 古くなっただ雑誌だけ？」

「雑誌？」

志奈ちゃんの手が伸びてきて、私はあわててよける。

「やめてよ。志奈ちゃんにそんな権利なんてないでしょ」

「権利？ あるに決まっているじゃない」

すると、両腕がブスギツネの念力で引き離されていつちやう。段ボール箱は地面の上に落ちちゃって、そのままノートが崩れ出ちゃう。最悪。念力を暴力に使ったりするから結婚できないんだよ。

念力縛りにあっている私をよそに、志奈ちゃんはノートを一冊拾い上げる。

「これって、あなた……」

あーあ。知らない。私はなんも知らない。志奈ちゃんは血相を変えてノートをぺらぺらと捲っていくけれど、私は記憶にございません。

「長一郎の……」

志奈ちゃんは一冊捲り終わると、落ちている一冊に飛びつき、しやがみ込んだままぺらぺらと捲っていく。

「どうして、こんなのを杏音が持っているのよ」

「て、天井裏にあったから」

「読んだのっ？」

志奈ちゃんが振り向けてきた顔はすごい緊迫していた。うーん。やっぱり、相当危険なノートだったみたい。

「読んだけど、意味がわからなかった」

「本当に？ 本当に意味がわからなかった？ 正直に言いなさい。」

本当にわからなかったのねっ？」

「う、うん」

志奈ちゃんはノートを段ボール箱に雑多に詰め込んでいくと、私を念力縛りから解放してから、段ボール箱を焼却炉に持っていった。「ノートの中を見たことは誰にも言っちゃ駄目だからね。私も黙っていてあげるから、絶対に言っちゃ駄目よ」

志奈ちゃんは段ボール箱ごと焼却炉に放り込んでしまった。ま、

私もそうするつもりだったんだけどね。

not happyな私

それにしても、あの志奈ちゃんをあわてようってなんだったの。なーんか、キナ臭い。黙っているだなんて。

夕飯のときもよそよそしかったしさ。

でも、怖いから詮索しない。というよりか、念力も使えなくなつて、危険なノートともおさらばして、私は普通の女の子になれたつてわけ。

だいたい、念力なんて必要ないんだから。

自転車のペダルを漕ぐのは疲れるけど。汗かくし。せつかく、朝のジョギングのあとに入浴剤入りの湯船にゆつくり浸かつて、カシスローズの香り纏わせて、杏ちゃん今日もいい匂い、だったのに。香水は付けられないしね。校則が厳しいから。どちらにしろ、香水のきつさが受け付けられない私だけど。

くんくん。

まあ、ちよつとは香っているかな。そんな汗かきじゃないし、大丈夫でしょ。

はあ。それにしても、疲れる。念力使いだつたものだから、私の自転車つて7,800円のディスクサウントママチャリなんだよね。もちろん、ギアなんてない。念力で全自動だったから、正直、一輪車でもいいぐらいだったんだから。それはさすがに変態だけど。

坂道は自転車から降りて徒歩。だるい。くりくり坊主の男子ががつりがつり立ち漕ぎして、私を抜かしていく。ふん。いつもは私に追い抜かれていたくせに。

面倒臭い。なんなの、この長い坂は。なんで、学校が坂の上にあるの。ここに学校を立てようって考えた人は頭がおかしいんじゃないの。もしくは、サディストね。それで、毎日坂道を駆け上がったって登校してくるマゾの生徒たち。

私はマゾじゃないから耐えられない。ギア付きじゃないから耐え

られない。自転車を押しているなんて私のキャラじゃない。可憐に
颯爽と、だけどのほほんと生きるのが畑中杏ちゃんよ。

Shit!

また追い抜かれた。くりくり坊主に。
つて、え？

さつき、私のことを追い抜いていった男子じゃないのあれって。
双子？ でも、彼も彼で何度も首を傾げながら立ち漕ぎしている。
Yシャツがズボンからはみ出ている。そんなのはどうでもいいけど。
そんなことはどうでもいいんだってば！

なんなの、これ。

まさか、私、またやつちやつたわけ？ でも、なんで。私、念力
なんて使おうとしてないじゃん。

うっん。あの男子はきつと双子なの。そう。絶対にそう。時空間
を歪めるなんて、私が出るはずない。だいち、やろつともして
いないんだから。

現実逃避、、しかできないわたし。

救急車、、ピーポーピーポー。

校門をくぐったときには、私はげえげえはあはあ。もういや。こ
んな毎日。皆、よくこんなふうになゾになれるよね。

「杏ちゃんおはよー」

自転車を停めていると、香織が歩み寄ってきて、私はハアと溜め
息。

「疲れた。死にそ」

香織の肩にもたれかかりながら、昇降口に向かう。
すると、先生が二人、血相を変えて飛び出してきた。

「おはよーございまーす」

先生たちは無視。全力疾走で校門の外に出ていつちやつた。

「何よ、無視しちゃってさ。挨拶しろって言っているのは先生たち
じゃないの」

「何かあったんじゃないの」

香織が不安そうな表情で先生たちが出て行ったあとの校門を振り返っている。

「誰かがコンビニで万引きでもしたんじゃない？」

「そんな感じじゃないでしょ。ほら」

職員室のベランダには女の先生たちがおろおろしている。うーん。確かに。緊迫感がかもし出ている。

「誰かが事故ったんじゃないの」

私はそう言いながら、昇降口で上履きに履き替えた。

「さつきさ、救急車の音聞こえたし。ピーポーピーポーって」

「事故だよ事故」

昇降口が上がってきていた男子が騒いでいた。

「ほら。名探偵でしょ」

笑みを浮かべた私に対して、香織の顔つきは不信感丸出し。

「不謹慎じゃない。よく、笑っていられるね。信じられない。杏子ヤンって、結構さ、ネジが飛んじゃっているよね」

「何、その言い草。私はall positiveでいたいだけだし。Meがpositiveであればeveryone happy。皆がhappy。悪いこともひっくり返ってhappy happy。事故も軽くてhappy間違いなし」

「野球部の花村君みたい」

「え、マジで！」

花村って、楓クンの名字だったよね、確か……。

「杏子ヤン……」

私は頭が真っ白になった。私は口をあんぐりと開けたまま首を小さく振った。

「I'm not happy……」

お見舞いに来た私

廊下から病室を覗いてみると、あーあ、野球部の汗臭い連中がうじゃうじゃいる。きつと、私が入って行ったら、ヒューヒュー！嫁さんが来たぞhey heyとか言うに決まっている。あいつらつて馬鹿だから。

香織と由利恵も付き合ってくれないしさあ。なんなの。私たちがいるとお邪魔でしょなんて言っちゃってさ。なんなの。

お見舞い品にフルーツパーラーで5,980円も使っちゃったし。また、志奈ちゃんの財布からルパン三世しなくちゃならないじゃん。「あら。馬瀬一高の人？」

あつ。誰だろ、このおばさん。美人だけど。楓クンにそっくりだけど。

「もしかして、楓のカノジョさん？」

おばさんはやにや笑っている。うーん。彼女じゃないけど、楓クンは事故って足の骨が折れて可哀想だから、一応、彼女ってことにしておいてやるのかな。

私はこっくり。

「そう。スタイルいいし、可愛いし、羨ましいわあ。楓も鼻高々ねふふ」

でしょう。私って、馬瀬三丁目にあるシーモアっていう美容室でカットモデルやっていますよね、うふふ。

それに、スタイルもいいから、読者モデルぐらいやればなんてよく言われるんですけどね。でも、私の家って厳しいから、モデルとかやらせてくれないんですね。

というのも、一番上の姉がですね、志奈ちゃんって言ってますけどね、この志奈ちゃんが翻訳家なんですよ。五力国語ぺらぺらなんですよ。それで、二番目のお姉ちゃんの琴音ちゃんは、東京の大学で研究員をやっているんですよ。

あ、ちなみにお姉ちゃん二人も、死んだお兄ちゃんも馬瀬第一高校の特進クラスだったんですけどね。だから、出来そこないの私はブーブー言われるんですよね。これって、難しい言葉で言つと、不遇っていうやつ？

だから、私も大学に行けつて。カットモデルなんかしていないで勉強しろつて言われるんです。

「楓ー。カノジヨさんが来たよオ」

あ、いや。そんな大きな声を出されると。

「えっ！ なんスか、カノジヨつて！」

「なんだよ、花村！ カノジヨつてなんだよ！」

ほらほらほら。汗臭い連中がわいわい囃し立て始めた。弱小野球部。こんなところで遊んでいないで練習しなよ。

「なんだよ、畑中じゃなか！」

「お前ら、やつぱり付き合っていたのかよ！」

「い、いや、付き合つてなんかいねえよ」

と、右足を吊るされている楓クン。顔が真っ赤。可愛いんだから、もう。

「ということ、あんたたちうつさいから帰ってくんない。ヒューヒュー騒いで他の患者さんに迷惑だし。汗臭いし。弱小野球部だし」
私に睨まれてぐうの音も出ない馬鹿ども。

「ま、お二人さん、熱いからなあ。帰ろうぜえ」

「しっしっ。さっさと失せろ」

「はいはい失せますよ。じゃあな、花村。ゆっくりするんだからなあ」

ぞろぞろと病室から出て行く連中ども。どうせ、部活サボりたいから見舞いに来たんでしょ。バーカ。

「なんだよ、畑中」

ベッドに寝転がってふてくされている楓クン。おでこに絆創膏を貼られている。私はその言い草にむかついたから、お見舞い品のバスケットを右足に引っかけてあげる。

「何やってんだよ！」

「じゃあ、お見舞いに来てくれてありがとうとっつて素直に言ってくれませんか」

唇を尖らせながら、小さい声でありがとっつて言ってきた楓クン。そのくせ、顔が真っ赤なんですけどネ！

「よろしい。それなら果物の皮を剥いてあげましょう。りんご、キウイ、グレープフルーツ、ジャム、どれがいいですか」

「いらないよ。ていうか、なんで、ジャムなんだよ」

「だって、一緒に入っていたんだもん。あのね、これはフルーツパラーで、お肌つるつるフルーツバスケットって札が貼ってあったんだからね。5,980円もしたんだからね。だったら、ジャムの一個ぐらい入っているでしょ」

「それって、ジャムじゃなくて、コンポートじゃないの？」

おばさんがにこにこしながらバスケットを私の手から取る。

「わざわざこんな豪華なものまでありがとね。私が剥いてあげるから、カノジョさんはどうぞ座って」

そう言っつて、ぺたぺたの丸椅子を出されてきたので、座っつてあげる私。スポンジが潰れていて見た目通りのぺたぺた。座り心地は最悪。

「カノジョなんかじゃないよ。この子は桜川の杏ちゃんだよ」

「あらっ。この人が杏ちゃん？」

素っ頓狂な声を上げて、果物ナイフの手を止めたおばさん。ふん。私っつて有名人なのかしら。

「あらあ。おじいちゃんも杏ちゃんは可愛い女の子だっつて言っつていたけど、まさか、あなたが杏ちゃんだったなんて。お母さん、想像してた女の子とは全然違っつてびっくりだわあ」

「おじいちゃんっつて楓クンのおじいちゃんですか？」

「そうそう。毎朝、桜川で会っつていたんですよ。おじいちゃん、今は足が悪くてねえ。なかなか散歩もできないの」

「でも元気なんですよ」

「元気だけどね。なにぶん、足が悪いから。いつも言っているわ、杏チャンは元気なのか。杏チャンはまだジョギングしているのかって」

「楓くんが付き合っただけで、ほしそうだから、ジョギングしてあげてます。声を立てて笑い上げたおばさん。睨みつけてくる楓くん。そのくせ、顔が真っ赤なんですけどネ！」

「でも、楓がおじいちゃんに杏チャンの話を毎日してあげているのよ。学校も同じだしね。それで、おじいちゃんは結婚するなら杏チャンとしろしろって言っているのよ。あれだけ明るくって気さくな子はいないって」

「もう、いいだろ！ 母さんは黙っているよ！」

「ふーん。そうなんだ。ふーん。私の話を毎日しているんだ」

したり顔で楓くんを冷やかす私。でも、私も顔が真っ赤になっちゃっているんですけどネ！

意味がわかない私

私と楓くんが結婚かあ。

うふふ。おじいちゃんだったら、気が早いんだからさあ。もう。

私たちってまだ高校生なんだし、将来のこととかあるし、お互いにさ、夢とか目標を尊重し合っていていかなくちやいけないわけじゃん。「何、にやにやしているのよ。気持ち悪い」

志奈ちゃんにぎろって睨まれて、味噌汁を啜っていた私は肩をすぼめる。本当に鬱陶しい、このブスギツネ。

「杏音、今日はずいぶん帰りが遅かったじゃない。どこで道草食っていたの」

お母さんに言われて、私は正当な理由を述べる。

「そうなの。でも運がいいわね。車に撥ねられて、骨折だけで済んだんだから」

私が all positive なおかげだろうね。そうすれば everyone happy だし。

でも、楓くんは今度の大会に出られないってごちていた。どうせ、一回戦で負けるんだから、いいじゃんって思うけど、よくないみたい。悔しいみたい。スポーツマンってわからないよね。どんなに弱くても勝てるって信じるんだから。

涙目だったし。

……。

だったら、このミラクル杏ちゃんが治してあげちゃおうかなっ。

時空間を歪めて。

……。

「ねえ、お父さん。念力って時空間を歪められるの？」

私が思い切って訊ねてみたら、お父さんは箸を止めて、首を傾げた。

「なんだい、それは」

どう見てもとぼけている。志奈ちゃんが怖い目をしている。お母さんは念力が使えないから意味がわかっていない様子。

「聞いたことないなあ」

「でも、お兄ちゃんが書いたノートに時空間の歪め方ってあったよ。そうしたら、とぼけていただけのお父さんの目が急に険しくなっちゃって、私を睨むように見据えてきた。」

「なんだ、そのノートってというのは」

「天井裏から出てきた。燃やしちゃったけど。志奈ちゃんが」

お父さんが志奈ちゃんに睨みを向ける。志奈ちゃんは眉をしかめて、私を睨んでくる。

「志奈、本当なのか」

「知らない」

志奈ちゃんはご飯をもぐもぐ食べる。

「知らないじゃない。どういことだ。答えなさい」

「知らない」

「志奈っ。答えろっ」

「ていうかさ、私、時空間を歪めてるっばいんだけど、どういことなのか教えて」

お父さんと志奈ちゃんは口を開けて、私に視線を向けてきた。お母さんも雰囲気やバさから私を見つめてくる。

「ほ、本気で言っているのか、杏音。冗談だったらただじゃ済まさないぞ」

「本気だよ」

私はポテトチップスの袋が元通りになっちゃったことや、くりくり坊主が二回も私の横を通って行ったことを説明してあげた。

すると、お父さんは深刻そうな表情でだんまり。食卓の上をじいっと見つめるだけで、何か言おうとするんだけど、何も言葉を出さない。

「ねえ。なんでなんでなんでー。念力が使えなくなっちゃったのに、なんで、こんなふうになったの。なんでー」

志奈ちゃんも唇を引き絞って、ただ黙っている。

「杏音」

お母さんが口を開いた。

「長ちゃんがなんで死んじゃったのか知っているの？」

「知らない。なんで？ 時空間を歪めて失敗しちゃったから？」

お母さんは黙っちゃった。

「自殺よ」

志奈ちゃんが言った。

「頭がおかしくなっちゃったのよ。その念力を使えるようになったやつたから、頭がおかしくなっちゃったのよ」

「意味わかんない。なんで、それを出来るようになったから頭がおかしくなるの」

私は、なんか、嘘臭いなって思った。だって、なんで時空間を歪められるせいで、頭がおかしくなっちゃうの。私は頭がおかしくなっていないもん。

「お兄ちゃんが自殺なんてするわけない」

「したんだからしょうがないでしょっ！」

志奈ちゃんがバチンと箸を叩き置いて、私はびくってしちゃう。や、やつぱり、言わなきゃよかったかな。

「杏音」

お父さんがぼそつと呟いた。

「どちらにしろ、杏音がやったことは偶然だ。だから、もう、そのことは考えるな。念力なんか使えなくなっただけいい。もう、考えるな」
意味がわかんない。意味がわかんない。意味がわかんない。

時空間を歪める私

楓クンは足を吊るされたまま、勉強をしていた。

「ガリ勉」

愛しの杏ちゃんが登場に気付いた楓クンは、教科書とノートを置むと、眉間に皺を寄せたまま私を見てくる。

「学校はどうしたんだよ」

「サボった」

私はポツキーの箱を突き出した。

「お金がないから、お見舞い品はこれで勘弁して」

楓クンは鼻で笑うと、ポツキーの箱を受け取り、切り取り線をビリビリって引いていく。で、ポツキーを一本、私に渡してくる。

「ポツキーを両側から食べるゲームって知ってる？」

「知らねえよ」

楓クンは顔を真っ赤にしながら、私に差し出してきたはずのポツキーをぶいと自分の手元に戻して、急いで口の中に押し込めちゃう。

「だいたい、なんなんだよ。サボって、ここに来る必要ないだろ」

「楓クンの足、治しに来た」

「は？」

「時空間を歪めて元通りにしてあげようって思って」

楓クンは怪訝な表情ながらも私をじいっと見つめてくる。私もじいっと見つめる。でも、恥ずかしくなっちゃって、ぶいってあつちに顔を背けちゃう。

「足が元通りになれば、甲子園に出れるでしょ。どうせ、一回戦負けでしょうけど」

「甲子園じゃないって言っているだろ」

「そんなことは私にしたらどうでもいいの。直してあげるって言うたら直してあげるの」

「そんなことできるのかよ。別にいいよ。おれが事故ったのが悪い

んだから。これも、おれの不注意のせいだ」

私はごちゃごちゃ能書きを垂れている楓クンを無視して、息を一つ、大きく吐いた。

「観自在菩薩、行深般若波羅密多時、照見五蘊皆空……」

時空間を歪めることが念力と関係しているんなら、念力を使うよ
うな気持ちの在り方に持つていけばいいってことでしょ。

念力は物を動かしたり、物を止めたりする力を念じることだけで、
その対象を物じゃなくて、時空間にすればいいだけ。

お兄ちゃんのノートには小難しいことが書いてあったけど、簡単
なんだから、時空間を歪めるのなんて。

「度一切苦厄、舍利子、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色
……」

「何を言ってるの？」

「ちよっと！ 黙っててよ！ 今、集中していたんでしょ！ ど
うして、そうやってごちゃごちゃうるさいの。黙って寝ててよねっ
！」

「おーい、楓え」

病室の出入り口から声がしたので振り返ってみると、車椅子に乗
った楓クンのおじいちゃんが、おばさんに押されて入ってきた。

「あっ、おじいちゃん！」

「あ、杏チャン。杏チャンじゃないか！」

私はおじいちゃんに駆け寄ると、昔やっていたみたいに、おじい
ちゃんの白い顎鬚をさわさわしてあげた。

「はははっ。懐かしいなあ。いやあ、ちっちゃいころから変わって
いないなあ、杏チャンは」

「おじいちゃんも元気そう良かった」

「いやあ、元気元気。杏チャンに会えていつそう元気になったよ。
いやあ、まさか、楓の見舞いに来て、杏チャンに会えるとは思って
いなかったからな」

「でも、杏チャン、学校は？」

おばさんに訊ねられて、私は首を振った。

「大丈夫です。今日は午前中で終わりですから」

「あら、そう。それでわざわざ来てくれたの。ありがとねえ」

「違うよ。そいつは嘘をついてんだよ。サボりたいからって、見舞いを口実にここに来ていただけだよ」

ベッドの上で楓クンが騒いでいるので、私はつかつかと歩み寄り、吊るされている右足を掴み上げて振り回してやった。

「私がせっかく来て上げているのに、なんなの、その言い草。そいつってなんなの。そいつ呼ばわりってなんなのよ」

「やめろよっ！ おいつ！ やめろって！」

あつ。

楓クンが暴れたから、ポッキーが床の上に散らばっちゃった。

「何やってんの、もうっ」

「お前のせいだろ！」

「あつはつはつは」

おじいちゃんが車椅子から腰を上げて、散らばったポッキーを拾っていく。

「喧嘩するほど仲がいいんだな。楓と杏ちゃんは。良かった良かった。楓と杏ちゃんが仲良しだと、じじいも嬉しいよ」

「嬉しがってないで、ちょっとは楓クンのことを叱ってあげてくれないかしら」

「あつはつは。杏ちゃんにはやっぱり適わんなあ」

そうして、おじいちゃんはにこにこしたまま、拾い上げたポッキーを私に渡してくる。

「ありがと。ほら、楓クン、おじいちゃんが拾ってあげたんだからちゃんと食べなさいよね」

私はポッキーの束を楓クンにぐいと突き出してやったんだけど、

楓クンは口をぽかんと開けながらおじいちゃんを眺めている。

「なんで？」

「おじいちゃん！」

おばさんがおじいちゃんにあわてて歩み寄って来て、目をきよろきよろとさせながら、

「だ、大丈夫なの？」

「ん？」

「足っ。足よっ。歩いているじゃないっ」

あ。そういえば、足が悪いんじゃないっけ。

おじいちゃんはぼけえつとしながら、自分の足元に視線を下ろしていく。そうして、首を傾げたあと、はて、と呟いた。

「確かに歩いている」

まさか……。

「全然、歩いている。全然、厳しくない。なんだ、これは」

「ま、まあ、楓くんが骨を折ったから、歩けるようになったんじゃないの。ハハ……。じゃ、じゃあ、そろそろ学校に行こうかな」

私は逃げるようにして病室をあとにした。

本当は楓くんの足を治すはずだったんだけどな。なんでだろ。まあ、いいかな。おじいちゃんの足が治ったんだから。うん。治ったからよし。あとは知らない。時空間を歪めるなんて知らない。い。了)

時空間を歪める私（後書き）

杏音の兄の謎についてはまったくの未回収ですが、実は兄の話が本編です。この作品は、本編のちよっとした派生として書いてみました。読んでいる人がいなかったら、本編は執筆しないつもりでしたが、どうやらわずかながらでもいるみたいなので、掲載してみます（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8908p/>

ある日、突然、念力が使えなくなったら

2011年1月23日17時41分発行